

## 春山の楽しみと危険性

6月になったとはいえ、今年ほど春の訪れを待ち望んだ年は過去にないでしょう。ゴールデンウィーク中の東川の天気はすべて雨か雪、そして曇り。平均気温はプラス5度に届かず、10度を超えた日は1日もありませんでした。例年はプラス20度を超えて初夏を感じる日も多くなることと比較すると、完全に異常気象を通り越し、地球の悲痛な叫びが聞こえてくるようです。

大雪山の雪解けも遅れ、5月初旬現在、旭岳温泉の積雪は例年の3倍近い3メートルもありました。過去にない積雪記録でしたが、春山に登り滑走する雪山愛好者にとっては、残雪期を長く楽しめる貴重なシーズンでもありました。

春山の魅力は、なんと言っても自由に雪上を行動し、夏には見ることの出来ない風景や場所を行動できることでしょう。締まった雪はラッセルの必要もなく、暖かい陽気の中、長距離の行動を可能にしてくれます。滑走愛好者にとっては、締まったザラメ雪が最高の滑走感と、大雪山との一体感を味わわせてくれます。



Nature Column (ネーチャーコラム)  
自然解説員などで活躍する人々をリレーしています。

しかし春山は、手軽に雪山を楽しめる半面、天候や雪質の変化が大きく、降雪後などは雪崩の危険性が非常に高くなります。温度変化の大きい雪質は滑落の危険性や大きなクラック(雪の割れ目)も多くなり、正確な状況判断が必要となります。



残雪模様の硫黄沼とオプタテシケ山

春山シーズンは最も大雪山を楽しめる時期でもありながら、最も危険要素を多く含む時期でもあります。常に天候や雪質、気温、斜面、自分や同行者の能力など、その場の状況を冷静に判断し、安全第一で行動しなければなりません。このようなことに注意して、この時期にしか見る事の出来ない大雪山の春を見つけに出かけてみてください。

自然写真家

高原温泉ヒグマ情報センター巡視員 松野智久



## 本で知るふるさととの山

### 明治の登山記に登場する東川の村人やお祭り

数多くある大雪山登山記の中で、相当昔のものとして、大平辰(おおだいら・あきら)新潟県出身)が日本山岳会機関誌『山岳』第八年第一号に発表した『ヌタブカムウシユベ』があります。

1909年(明治42年)8月22日、旭川の旅館笹岡を出発してから26日に旭川に帰着するまでの道中、東川村の様子や出会った村人のことにもふれているおもしろい内容です。

「大雪山は、原名ヌタクカムウシユベにして(中略)旭川地方のもの、概して忠別山と称す」と記していて、旭岳とは書いていません。午前7時に出発、四条通りを一直線に追分に出て、右へ曲がって東川へ。「十時西八号線に着し休憩す馬市あり数百の馬匹群集す」。健脚ぶりがうかがえます。草鞋(わらじ)と小かごを竿(さお)に掛け、一足三銭五厘也という無人の商いに目が止まり「何ぞ其れ床しき」と感嘆しています。

新開地東川村は「東西南北に区画線を設け、各線間は五町とす、人家疎らに散点す。十二時、東五号線太田常太郎といふ雑貨店に憩い、昼飯」。店主は冬の気候が穏やかな様子話し、「暴風なきこそ幸なれ」と感じ入ります。

3時25分、東20号線に着き、村は



『山岳』復刻版。日本山岳会が1906年(明治39年)4月に結成され、この年を第1年として毎年1、2、3号の3冊ずつ発行されました

「主人快活にして能く談ず、其弁ずる所によれば、忠別川の本流を遡れば、全川懸りて一大瀑布となる、アイシポプの滝と称す」。当時は羽衣の滝ではなくアイヌ語名で呼んでいたようです。

滝の方向ではなくユコマベツ経由で旭岳に登り、行きと帰りにそれぞれピウケナイで野営。帰途の26日、常設競馬場で競馬、祭典たけなわの東川神社であじうりを食べるなど、東川でのひと時を楽しんだようです。「北州の高峯、山頂の偉観、大自らの靈域に接せんと欲する者は、すべからく本山に攀登すべきなり」と締めくくっています。

町史編さん専門員、西原義弘